

---

ハンス・ホフマンの作品におけるイメージ再考  
— 《偶像崇拜者 I》の象徴的意味について—

---

ドイツ出身のハンス・ホフマン(1880-1966)は、パリやドイツで当時の前衛的な作品や理論に学び、1931年の渡米後は教育者としてのみならず、抽象表現主義の画家として活躍した。彼の理論の形式的な側面は批評家クレメント・グリーンバーグに受け継がれ、その後の美術史の形成に影響を与えた。その為ホフマンの絵画に対する評価もまた、形式的な面を偏重する傾向があり、作品にシュルレアリスムの影響が指摘される場合においても、主にオートマティスムの線描への関心として関連付けられ、神話的でプリミティヴなイメージとの関係は看過されてきた。しかし代表作の一つ《偶像崇拜者 I》(1944、カリフォルニア大学バークレー美術館)は、ホフマン特有の激しい色遣いや線などの形式的要素が見られるものの、キャンバス中央に描かれた人物像は、そこに現れたイメージに注目すべきことを主張している。またホフマンは、芸術家の知的活動として、視覚を通じて捉えた世界を解釈し、そのイメージを描き出すことを重視したが、この作品はそのような定義を拡張し、判別可能な形象を手放す転換点を示している。従ってこの制作過程を検証し、シュルレアリスムからの影響を見直しつつ、ホフマンにおけるイメージの重要性を再考したい。

当初《絵画》と題された《偶像崇拜者 I》はそれまでの傾向とは異なり、実際に視覚的に捉えた椅子を描くことから、連想によって徐々にイメージを変化させている。これは現存するホフマンの蔵書の彼自身による書き込みから推測すると、ミロの絵画におけるイメージの展開に想を得ている。またメキシコ出身のシュルレアリスト、ヴォルフガング・パーレンが1942年に発表した、現実の対象の再現ではなく、構想力によるイメージが持つ象徴的な価値に注目した論文の影響も指摘出来る。しかしそれに矛盾するように、ホフマンはプリミティヴな文明で生まれた彫像が有する、観者の精神に訴えかける神秘的な力についての手記を残しており、対象を見つめ、それを描き出す必要性をも考慮している。

このような矛盾する考えに逡巡しつつ、椅子から偶像を崇拜する者へとイメージを展開する時、模倣と創造の違いを意識的で、現実の世界を見つめることが真実の追求と考えたホフマンの念頭には、プラトンの『国家』における寝椅子を模倣する画家への批判があっただろう。両者の画家への見解は異なるものの、真実を求める姿勢は共通している。それ故ホフマンは、プラトンの画家批判を敢えて自身の信条、つまり画家による真実の追求を表象するために利用したのではないか。さらに「偶像崇拜者」と名付けることで、イメージの生成とタイトルの示唆するものとの矛盾を際立たせ、そこに彼の絵画観を象徴させていると解釈することが出来る。

以上のようなホフマンにおけるイメージの再考は、彼の作品の再評価に留まらず、形式主義とは異なる見解からのモダニズム芸術の再考に寄与するであろう。